

副教材で授業の達人に

酒井 志延



1 メディアを使いこなす教員

教材を何も持たない状態で授業を始めると、10分ほどは保たせられるかもしれない。しかし、口頭での説明だけだと、生徒も理解しにくいから、重要なことは書きたくなる。そうすると、黒板とチョークが欲しい。これでもう少し保たせられるだろう。だが、自分の持っている知識を総動員しても、なかなか週3回の授業をこなすことは難しい。その意味で検定教科書の価値は大きい。これが1冊あるだけで、なんとか1年間授業をすることができる。

けれども、教科書は、紙の媒体でしかもページ数や語彙数などの制限がある。これだけでは、授業が単調になりがちである。自分の英語だけでは不安で、英語母語話者の音声を聞かせたい場合や複数の人が話している状況を提示したい場合はテープやCDを使う。また、中学校の先生に多いが、新出単語を数クラスで練習する時に、フラッシュカードを使う先生もいる。このように全ての教員が、通常複数のメディアを使いこなして授業をしている。そしてメディアを使いこなすことに教育効果を上げている。つまり、黒板の書き方を含め、教員は年齢を重ねるごとにメディアの使い方がうまくなる。さらに副教材というメディアをも使いこなし、授業を魅力的なものにしていくことができる。

2 副教材を使いこなすメリット

教室で使われている副教材で、一番気合いが入

っているのは、教師が自分で作成する教科通信のたぐいの独自教材だろう。週刊、いや日刊に近い状態で良く工夫されているものをいくつも見せて頂いた。十数年来、朝5時に起きて作っていらっしゃるという先生にもお会いしたことがある。思わず脱帽の教科通信を作っていらっしゃった。作り方のコツを教えて下さったが、なまけものの自分には出来そうもないと思った。でも、それほどの情熱をおかけになる気持ちは理解できる。副教材を適切に与えれば、生徒は、教科書とテープ／CDだけでは与えられない興味関心を授業に見せることがあるからだ。いわゆる「食いつきが良い」という感触だ。教室で無気力な生徒を教えるより、「先生の授業はおもしろい」とか「ありがとう、先生」と言ってくれる生徒を教える方がずっと教師冥利に尽きる。つまり、だれでも授業の「名人・達人」になることを可能にする副教材もある。

私は生来どもりがちで、しかも非常に照れ屋なので、人前で話すのが得意ではない。教師としては武器であるはずの話し方に難があるといつても良い。だから、教材の魅力で授業に引きつけることにかけてきた。成功したこともあるし、まったく受け付けられなかったこともあった。しかし、年齢を重ねるごとに、しだいに外れることが少なくなってきたよう思う。

3 外れない副教材

外れない「こつ」は何だろうと考えてみると。くりかえすようだが、やはり生徒のレベルにあって

いてしかも生徒を知的に面白いと思わせることだろう。面白いと思うと生徒は本気になる。勉強に本気になると生徒は伸びる。本来ならば、生徒の学習意欲や関心は一人ひとり違うので、生徒分の副教材があっても当然かもしれない。副教材の話ではないが、国語教育でいまも語り継がれる大村はま先生は、戦争直後の教科書もないすさんだ時代に、勉強の意欲もない生徒たちに、新聞を切り抜いて、一人ひとり違う記事に、学習の手引きを書いて渡し、それを教材にされていたそうだ。そして、その時の様子を次のように書いていらっしゃる。「そうしたら、どうでしょう。仕事をもらった者から、食いつくように勉強を始めたのです。私はほんとうに驚いてしまいました。(中略) 子供というものは『与えられた仕事が自分に合っていて、それがわかれば、こんな姿になるんだ』ということがわかりました」(大村はま他 2003: 133)。

副教材を与える意味は、大村先生がおっしゃるように、生徒に「やってもいいな」と思わせることだと思う。だからといって、忙しい現在、生徒一人ひとりに特製の教材を渡すような作業に時間をかけることは出来ない。また、大村先生の時代と異なり、豊富な教材が安価で入手できる時代でもある。多くの生徒は同年代で同じような文化を共有し、同じような環境におかれていることもあります。共通する心理状態を見つけるのは、さほど難しいことではない。

4 私の使う副教材

私はクラスによって、2種類の副教材を使う。一つは能力と意欲が高い学生を教える場合で、教科書を超えて養成したい能力を強化したりするタイプである。例えば、語彙強化プリントであれば、授業が始まる少し前に教室においておく、学生はそれをつかんで、辞書を使ってパズルを解く。5番以内に解き終わった者にポイントを与える方式で、頭を使うように出来ている。残りの者

は、宿題でやってこなければならない。この方式で授業を行うと、①辞書を忘れるものはいない、②授業に遅れるものはいない、③パズルで集中するので、授業のレディネスがすでに授業の前にできている、というメリットがある。

もう一つは習熟度が低い学生対象で、ディズニー映画を使い「勉強が楽しい」と思わせる。映画の対話部分を教材として使う。練習する英文にはカタカナをふたものとカタカナをふらないものを並列して渡す。カタカナがないと、できない学習者は読もうともしない。だが、何回か練習しているうちに、「できるだけカタカナのない方で練習しよう」と言う。そうすると、ルビのない方で練習する学習者がしだいに増えていく。数行の簡単な対話だが、練習をチェックして点数を与えるし、練習の後、字幕無しで映画のその部分を見せる。そうするとセリフが聞き取れるので、自分が上達している実感を持つ。回を重ねていく内に熱心になっていくことがわかる。

5 教師が心がけること

副教材を長年使ってきて言えることは、まず、学習者の実態を把握することの必要性である。実態に合っていない教材を与えておいて、購入させたのだからと言って使い続けるのは、結局生徒から英語の学習の関心を奪ってしまう。つぎに、幅広く副教材を探すことである。業者から無料で送られてきた見本もいいが、書店で売られている教材にも良いものがある。お金を払ってまで買おうとさせる教材とはどんなものか研究することが大事である。そして、学習者に知的に向上しようとする意欲を持たせるためにはどうすればいいのかということを知るために、教師自身のたゆまぬ研究・研修が必要であることは言うまでもない。

(さかい しえん・千葉商科大学教授)

【引用・参考文献】

大村はま他 (2003) 『教えることの復権』ちくま新書